

# AR CA DIA

56  
SPRING 2013

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース

[アルカディア]



# 眼の極楽 七 人の姿かたちを描く⑥

館長 榊原悟

(承前)そこで改めて確認しておきたい。

それは、本法寺本『涅槃図』の制作における等伯の立場と云うか、その係わり方についてである。と述べると、

——この『涅槃図』を描いたのは等伯その人ではないか。であるならば、その係わり方は絵師として決っている。またそうであればこそ、あの緑衣の男を等伯の自画像とみたのだろうか。いまさらそんなこと改めて確認する程のことか。

と、苦言を呈されるのがオチと云うもの。

確かにそうである。等伯は絵師としてこれを描いた。だが絵師も人間。作品との係わりにも、ごく稀だが、筆者として以外の場合もあった。本法寺本制作における等伯が、まさしくそれで、そうであればこそ注意を喚起する意味で、改めてこのことを話題に挙げたのだ。それにわたしたちの絵師に対する関心は、ともすれば筆者問題に偏し過ぎる嫌いがあるからだ。

では本法寺本制作に係わる等伯のもう一つの立場とは……、と云えば、もうお察しだろう。すでに本図裏面銘に触れた折にも述べたはずだ。その銘文には、等伯の養祖父母以来、逆縁の息子二人を含め、等伯一族の法名が列記されていた。つまりこの『涅槃図』は、ここにその名を記された人びとの菩提を弔うためと、等伯夫妻らの逆修のために描かれたものであった。さらにこれを受けて図の左右両端下部には、本法寺の住職日通自身が、

右端

願主 白雪舟五代長谷川藤原等伯 六十一歳 謹書

左端

叡昌山本法寺 常住 慶長第四己亥年卯月廿六日吉辰 住持沙門

日通 (花押)

と記し、慶長四年(二五九九)四月二十六日、この『涅槃図』が本法寺常住として寄進されたことが分かる。願主すなわち施入主は等伯であった。上洛して四半世紀、功成り名遂げ、一族を供養するまでになった等伯は、この銘文を定めし満足の思いで眺めたことであろう。つまり等伯は、『涅槃図』の絵師である以前に、その願主Ⅱ施入檀那であったのだ。むろん緑衣の男は、その檀那の画像でもあった。

興味深いのは、こうして『涅槃図』に檀那の姿を描き込む作例が少なからず見出せる点である。緑衣の男を絵師の自画像とみれば、まったく類例もないが、これを施入檀那の画像とみれば、類例それも先行作例があるのだ。そのことは、彼を等伯その人と見るわたしたちにとつて甚だこころ強い。『涅槃図』制作における等伯の立場にこだわったものそのためだ。

さしずめ愛知県あま市・甚目寺の『涅槃図』(鎌倉時代後期の作)こそが、その代表であろうか。右手枕をして横たわる釈尊の頭部側、墨染めの衣の尼僧が片膝を立てて坐る。合掌し、釈尊を見つめるが、その表情は、まわりのものすべてが悲しみの相であるのと対照的に、むしろ微笑みさえ浮かべているようだ。まさしく本法寺本のあの飼い主に尻尾を振って自足する、あの洋犬の姿を思わせる。そんな彼女は他の会衆から一人浮いている。目尻に皺を入れた特徴ある目つきや、ふっくらした顔立ち、明らかに或る特定の人物を描いたとみられるが、その彼女の傍らに短冊形を設け、「施入檀那」と記す。この尼御前こそが、甚目寺本『涅槃図』の施入檀那Ⅱ供養者なのである。

加えて愛知県内稲沢市の無量光院にも、ほぼ同じように尼僧を画面の片隅に描いた『涅槃図』(甚目寺本をやや遡る作か)があるというし(宮島新一著『肖像画』日本歴史叢書 吉川弘文館 一九九四年)、さ

らに江戸期の作であるが、岐阜の宗泉寺本『涅槃図』にも「聞信宗光信士」と記名された裕福な町衆が描かれている（赤澤氏前掲書）。彼もまた、ただ一人顔を画面のこちら側に向ける。いや我が岡崎市にも松平信忠（法名「泰孝」一四九〇〜一五三二）が、自らの姿を描かせ寄進した『涅槃図』（大樹寺蔵）が伝わる（図1）。

また近年紹介された丹後・遍照寺の一本にも、片膝立ての婦人が描かれている（赤澤英二「伝曾我宗丈筆の涅槃図をめぐって」『国華』1226号 一九九七年）。チャ・チョゴリ風の着衣が興味深いが、その風姿から彼女もまた供養者であろう。筆者を曾我宗丈と伝える。言うまでもなく大徳寺真珠庵客殿障壁画の筆者とも目される絵師である。朝鮮画との関連も云々される絵師だ。さらに曾我派と云えば、越前朝倉氏と関係深い画派である。遍照寺のある丹後とも近い。等伯も信春時代に曾我墨溪の『達磨図』（真珠庵蔵）を模写しているし（石川・龍門寺蔵）、狩野一溪の画伝書『丹青若木集』によると、等伯ははじめ曾我紹祥について絵を学んだとも伝えられるなど、何かと曾我派とは関係深い。となれば等伯は遍照寺本など曾我派の作品を通し、「涅槃図」にその施入檀那〓供養者を描き込むことを学んだとも考えたいのだが、そこまでピンポイントで考えなくても、前述した本法寺本に先行する「涅槃図」の少なからぬ作例に、すでに供養者の姿が描き込まれているのを見れば、等伯がこの手法を知ったのも、もっと広くそれらを通じて、とみる方が自然だろう。

だがその際、等伯が自らの姿を捧飯の供養者、鍛冶工純陀に準えて描いたことは、実に正解であった。それというのも、そもそも前掲した『涅槃図』に施入檀那たちが、自らの姿を描き加えたのも、一供養者として純陀に続かんことを念じたからである。しかし、彼らは、他の会衆たちから浮いた存在となることも構わず、自らの姿をそのまま描き加えた。その姿もおおむね画面のこちら側に体を開く——つまりは積尊を見つめない点で一致する。だが等伯は、自らを純陀に重ねること

他の会衆たちとの違和感を打ち消すことに成功した。絵仏師として活躍した信春（等伯）の「涅槃図」理解が如からしめたものであろうか。ここに至れば、わたしには、あの緑衣の男が等伯その人であることに何の疑いもない。

では緑衣の男は本当に等伯に似ているのだろうか？ 禿げてむさ苦しいその風姿を、あの一代の傑作「松林図屏風」の絵師とみることは、心苦しいのだが、知る人が見れば、このむさ苦しい男が願主等伯その人を彷彿させるのだろう。むしろ、現状では、それを確かめる術とてもない。

となればここはもう一点、似ている『涅槃図』の男の例を挙げずばなるまい。ボストン美術館に所蔵される一本である（河野元昭「英一蝶筆涅槃図」『国華』1373号 二〇一〇年）。筆者は英一蝶（一六五二〜一七二四）。その横たわる積尊の頭部側、沙羅双樹の根元の、ほぼ緑衣の男がいたあのあたりに、問題の男が坐す（図2）。模本ではあるが、幸いにも英一蝶の画像も伝わる（二代高崇谷模本 東京国立博物館蔵 図3）。しかも、『龍溪小説』や『画師姓名冠字類抄』などが、一蝶の風貌は、色白で目と鼻の大きな異相であったと伝える。わたしには、このボストン本『涅槃図』の男こそは、その一蝶その人に見えるのだが、いまは指摘するだけにとどめ、すべては今後の検討にゆだねよう。

が、それにしても絵師たちは、さまざまに趣向を凝らし自らの画像を描いたものだ。しかし、そのことこそが、まさしく人の姿と私たち〓肖像画の歴史の近世を、それ以前と劃期する一指標であった（この項終わり）。



図1

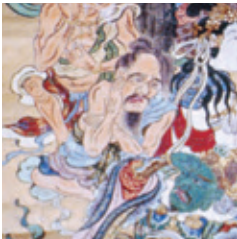


図2



図3

図1 松平忠信像（『涅槃図』部分）大樹寺蔵  
図2 英一蝶筆『涅槃図』（部分）ボストン美術館蔵  
図3 『英一蝶画像』（部分）東京国立博物館蔵

今回のポール・デルヴォー展は、日本で初めてその全容を紹介する展覧会です。

このような充実した展覧会が岡崎で開催できたのは、ポール・デルヴォー財団の理事長シャルル・ヴァン・デューンさんの惜しみない協力があつたからです。私は二〇年ほど前に彼が来日した際にお会いし、それ以来親交させていただき、私がベルギーに行くと、彼は自宅でパーティーを開いて歓待してくれました。二人で杯を交わしていると、元気のよい娘さんたちが歓声をあげてガーデンを駆け回る…そんな家庭的な雰囲気の中で会話を楽しみました。気がつけば夕暮れ時になっていて、邸宅を二歩出たら、そこはまさにデルヴォーが描いた、あの静寂な夜の情景であることに、はっとしたことを思い出します。思えばそこはデルヴォーが住んだ家で、今回出品されている《グリーンティングカード》に描かれた食卓に私は座っていたのです。子供のいなかつたデルヴォーは、甥のヴァン・デューンさんを息子のように可愛がり、彼もまた誰よりもこの画家を愛し、その最期を看取りました。彼はデルヴォーの最初期や最晩年があまり紹介されることがないのを残念に

思っており、私たちはいつしか全貌を網羅した展覧会を日本で紹介したいと話し合うようになっていました。

三年ほど前、七〇歳を越えた彼は、その夢を娘のジュリー・ヴァン・デューンさんに託し、日本側の監修は私がさせていただきますことになりました。ジュリーさんは、私が彼の家を最初に訪れたときに、ガーデンを駆け回っていた、かつてのあの元気な少女でした。

ジュリーさんと私の展示構想は近く、ほどなくして構成は決まりました。ところが作品の選定をするにあたり、彼女は大胆な提案をしました。ベルギーにある作品のみで構成したいというのです。私は全ての作品をベルギーから運ぶとなると、費用面からも大変ではないかと案じました。しかし彼女は持前の行動力をもって、私の提言にも応じながらベルギー国内から着実に作品を集めてくれたのです。それが今回の展覧会が過去のものと一線を画し、新鮮で充実したものとなった大きな要因でした。さらにデルヴォーの人物を伝えるために、アトリエにあった鉄道模型やモチーフとなった鏡やランプ、手紙なども展示することにしました。こうしてデルヴォー財団が初めて企画に

## EXHIBITION

企画したデルヴォー展ができあがったのです。

本展は、昨年の七月に鹿児島を皮切りに、東京、山口、埼玉と巡回し好評を博します。そしてこの四月、いよいよ岡崎での公開。ところが日本での開幕から三か月経った一〇月、ベルギーから悲報が入りました。ヴァン・デューンさんが亡くなられたのです。ほんの数か月前に、自身の近著“PAUL DELVAUX HIS LIFE”を送ってくれたばかりだったので、突然のことで信じられません。彼からはこの二〇年間、デルヴォーのことを学び、ベルギーの豊かな芸術文化や人々の温かさも教わりました。

本展が開催できたのは、ヴァン・デューンさんの熱意と、その意志を継いで実行してくれたジュリーさんのおかげと感謝しています。彼も念願だった日本での巡回展の実現を見届けて、安心して旅立たれたのだと思います。本展を岡崎で開催している間、私はデルヴォーの作品に囲まれながら、ヴァン・デューン氏と杯を交わしているような、そんな気持ちでいられるのではないかと思います。



《グリーンティング・カード》1958年 ポール・デルヴォー財団蔵

# ポール・デルヴォー展

— シャルル・ヴァン・デューン氏に捧ぐ

村松和明

会期：平成23年4月6日(土)～5月26日(日)

ゆかりのまち提携三〇周年記念

# 佐久市近代美術館名品展 きらめく日本画

— 大観・栖鳳から現代まで

堀江登志実



平山郁夫「仏教伝来」1959年（後期展示）

## 1 ゆかりのまち提携三〇周年

岡崎市美術館博物館では「ゆかりのまち提携三〇周年記念 佐久市近代美術館名品展 きらめく日本画—大観・栖鳳から現代まで」を六月八日から八月四日まで開催します。佐久市は長野県の東部に位置し、二〇〇五年四月の四市町村の合併で新しい市に生まれかわっています。この合併市町村のうちのひとつが、岡崎市と一九八三年七月一日にゆかりのまち提携をした白田町です。この提携は江戸時代に三河国奥殿藩の領知が岡崎市内だけでなく旧白田町域にも存在し、幕末期に奥殿藩が拠点となる陣屋を田野口（旧白田町）に移すなど歴史的関係があったことによるものです。

二〇三三年は岡崎市と旧白田町がゆかりのまち提携を行って三〇周年になります。本展覧会はこのゆかりのまち提携三〇周年を記念して開催するものです。

## 2 油井ニコレクション

佐久市立近代美術館は長野県立駒場公園の一角に一九八三年開館、一九九〇年の増改築を経て現在に至っています。美術館が建設されるに際しては市民の熱意と協力があつたわけですが、

そのきっかけを作ったのが美術年鑑の創業者であり佐久市出身の由井二氏による美術品約七百点の寄附です。

油井二は一九〇九年佐久市香坂で生まれ、二十二歳で画商の世界へ足を踏み入れます。風呂敷に仮巻軸を包んで担いで歩く「風呂敷画商」として中国や台湾、朝鮮半島等にも渡りますが、戦争などの理由により四〇代を迎えるまで職を転々としていました。そんな油井に画商としての決意を固めさせたのが武者小路実篤との出会いです。職も定まらず、事業に失敗した油井に励ましの言葉を贈り、失意の油井を立ち直らせ、美術業界への道を決心させたとされています。以後、油井は山本丘人や杉山寧、東山魁夷、高山辰雄、平山郁夫といった日本画家を中心に交際が広がってゆきます。多くの画家に接するなかで、油井の胸のなかに「故郷に美術館を」の思いが芽生えたとされ、それが美術館へのコレクションの寄附行為となりました。油井による美術品の寄附は美術館開館後も一九九二年に没するまで続けられ、二層のコレクションの充実がはかられ、佐久市立近代美術館のコレクションの根幹をなしています。

## 3 本展の構成

佐久市立近代美術館は、現在二千五百点に及ぶ美術品を所蔵し、近代から現代までの美術史を概観できる質の高いコレクションを形成しています。このコレクションの根幹をなしているのが先ほど紹介した油井コレクションの日本画であることはいまでもありません。今回の展覧会ではその幅広いコレクションより、近代日本画の名品を三章に分けて展示いたします。第一章の「コレクション形成のはじまり—油井二と武者小路実篤」では生涯の師と仰いだ武者小路実篤の作品を通して油井と実篤の関わりについて紹介します。第二章「近代の日本画—伝統と創造」では、明治から大正を経て、戦前の昭和期までの作品を展示します。横山大観、下村観山、竹内栖鳳など日本画の革新をめざした画家たちの作品です。第三章「戦後から現代の日本が—模索と挑戦」では戦後から現代までの模索と挑戦のなかで変革していく日本画を紹介します。平山郁夫のほか千住博、岡村桂三郎などに至る作品です。油井二氏が画商として本格的に動き始めるのが戦後からであり、コレクションではこの時期の作品が充実しています。油井コレクションの神髄をご鑑賞ください。

会期：平成23年6月8日(土)～8月4日(日)

一月の澄み切った空気の中、市美と泉美で二本の展覧会を見ようと静岡市へと車を走らせていたのですが、あまりにも富士山がきれいに見えるので急きょ予定を変更。富士宮の浅間神社へと向かい、高邁な富士の姿とそこから湧き出る伶俐な水にふれ、いにしえからの霊峰のもつ靈気に十分ひたつたのでした。結局、展覧会は静岡県美をキャンセル、市美のみで日没を迎えてしまいました。関東出張の新幹線や東名利用の美術専用車の車窓からその全容はいつも目に見えていたのですが、その神々しい容姿に近づいて見たのは初めてでした。

これまで山麓へは何度も集荷等で足を運んでいるのですが、一度もその姿を間近に目にした記憶がないことにはたとえ気がきました。その時の借用先は忍野八海近く、ロボット機械・工作機械で日本を代表する企業として知られるフアナックでした。御殿場駅前からバスに乗り須走から籠坂峠を越えようと目の前には山中湖。湖畔を過ぎると忍野村に入ります。山裾に広がる広大な森の緑に黄色い建物が映えようになる



とフアナック本社で、行き交う社用車も黄色でした。天気もまあまあであつた気がするのですが、挨拶、集荷、返却と三度も伺つたのに富士山の記憶だけがないのです。社内の一角に建つ立派な美術館、曙館に所蔵される開国歴史資料の中の一点、谷文晁『犀図』の借用に伺つたのですが、作品は門外不出、曙館も一般公開されておらず、海外からの賓客などが対象とのこと、極度の緊張感の高まりの中、富士に気をそぐゆとりがなかつたのでした。作品集荷の旅は、借用相手への気遣い、作品への配慮といつも気を緩めることのできない緊張の連続ですが、その極まったのがこの時だったのでしようか。

## COLUMN & TOPIC

ひと言でいうならば、愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンで、里山暮らしを実践している津端ご夫妻の日々の生活記録、つばたファミリーの家族史ともいうべき内容です。なつかしい未来のライフスタイル、スローライフとして共感する方も多く、知る人ぞ知るご夫妻のようです。(が、私はこれを読むまで全く存じ上げませんでした。)

著者である津端英子さんは半田の古い造り酒屋に生まれ育ち、結婚するまではお金をもつたことがないお嬢さま。ご主人の修一さんは居を構えているニュータウン計画を手がけた東京大学出身の建築家。そんなお二人が結婚し、東京、高蔵寺、広島を新幹線で行き来する忙しい生活を送るなかで、家族農園での素人の野菜づくりをきっかけにして、ついにはニュータウンの300坪の自宅にキッチンガーデンと称する畑と雑木林をつくりあげます。春夏秋冬、季節やお天気にあわせて120種類の野菜づくりをし、収穫し、無駄なく調理し、美味しく食べる半自給自足の生活を送るようになったのです。その奮闘ぶりが英子さんが

### 津端英子・津端修一『キラリと、おしゃれーキッチンガーデンのある暮らしー』

おしゃべりをしているかのように綴られているのですが、レシピもあっていいのです。食べるものは生きていく上で一番大切よ、と教えられてきたと述べられているように、今日の様々なアレルギーを思うと、良い食品、昔ながらの伝統的な食べ物の大切さを感じさせます。

スローライフと聞けば、何もしないようなのんびりした暮らしを連想しがちですが、この津端夫妻がコツコツと実践してきた生活は、必ずしもそうではありません。収穫した野菜を冷凍保存するための冷凍庫は3台、合計420Lもの容量がフル稼働です。東京住まいの娘夫婦への旬の手作り食材を詰め込んだ宅急便は週二回の定期便、何年も続けます。調理に手抜きは一切なく、この準備も大変です。でも、お二人は言うのです。不便で、手間、暇かかる暮らしが好きよ、と。ホンモノとは何か、大地にしっかりと根をおろした力強い生活を読むことができます。キラリと、おしゃれです。

(新書判、二五六ページ、八四〇円、ミネルヴァ書房、二〇〇七年)

「こんなの「読んでます。」「見ました。」

読んでます。

【荒井】 五来重『高野聖』『宗教歳時記』『仏教と民俗』『山の宗教』『四国遍路の寺へ上下』『西国巡礼の寺』『角川ソフィア文庫』最近、枕元に溜まっているのは故五来重先生の本。寝付く前に何節かをパラパラとめくってしまいます。日本史、宗教史、仏教教理、民俗学と様々な分野を遡り、歴史学の王道からはみえてこない庶民目線が斬新で、いつも刺激を受けています。博覧剛毅の名著の数々がいまでは角川ソフィア文庫で読むことができます。

【堀江】 最近読んだ本に具座勇著『揆の原理』（洋泉社）があります。中世の二揆の思想と行動原理を現代のソーシャルネットワークとの対比で論じたところに斬新なものを感じました。現代的問題にも迫ったその視点には驚きました。

【村松】 佐々木央『森鴎外と村山槐多ーわが空はなつかしき』（富山房インターナショナル）当館で開催した『村山槐多の全貌』展についても触れられています。

【千葉】 展覧会とは無関係に。『柳田國男全集』、『ウェーバー』、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、『林道郎・松浦寿夫編集の批評雑誌』、『ART TRACÉ PRESS』、『三島由紀夫『美しい星』などを、入浴中や就寝前につまみ食いの様に読んでいます。

見ました。

【堀江】 岡崎市美術館博物館設計者である栗生明氏の設

—各学芸員が最近見たものや読んでいるものをご紹介します—

計という伊勢神宮のせんぐう館に参拝を兼ねて行ってきました。勾玉池のほとりに周囲の自然環境と一体化した建築は当館との類似性を思わせませす。館内にある式年遷宮で造りかえられる正殿の原物大の模型は迫力があります。

【村松】 「ラファエロ展」（国立西洋美術館）へ大公の聖母」を見るだけでも十分な価値があります。

映画「父をめぐる旅 異彩の日本画家・中村正義の生涯」娘の倫子さんが、父の真の姿を探して旅をする…。

【浦野】 「白隠展 禅画に込めたメッセージ」（Bunkamuraザ・ミュージアム）、「鬼オニ・ONI展」（豊橋市美術館） 法隆寺伽藍及び大宝蔵院、中宮寺。日本には多様な信仰が息づいていることを改めて体感。

【千葉】 予想外に面白かった「川村清雄展」（静岡県立美術館）。「絵画」についての深い考察と実践は、ロビーに展示してあった現代美術よりも現代性があつたかも。

【伊藤】 たくさん観て回った展覧会から幅広く3本。「明治の傑人 岸田吟香〜日本で初めてがいっぱい！ 目録・新聞・和英辞書〜」（豊田市郷土資料館） 「明治大 学博物館・南山大学人類学博物館・名古屋博物館 同企画 驚きの博物館コレクション展―時を超え、世界を駆ける好奇心―」（名古屋博物館） 「清水六兵衛 家 京の華やき」（愛知県陶磁資料館）

「はじめまして。」

おかざき世界子ども美術博物館と社会教育課文化財班の二つの部署を行き来し、この度、岡崎市美術館博物館に異動になりました内藤高玲です。



約二〇年間の間に二つの部署を異動していましたが、その間に感じ、また心がけてきたことがつだけあります。子どもたちや文化財に興味のない方にもわかりやすく、美術や文化財に親しんでいただくということ。発掘調査後には必ず現地説明会を行い、子ども美術博物館では子どもたちの目線に立った展示を心掛けてきたつもりです。当館でも、その初心を忘れないようにしていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

新しく学芸員として

採用されました。湯谷翔悟です。出身は鳥取、大学は広島と、中



国地方で育ってきました。新天地での仕事。どんな発見ができるか楽しみで仕方ありません。歴史の魅力を多くの人にお伝えしていけたらと思います。よろしくお願いたします。

管理班も新しい班長に寄田が、施設担当に磯村が着任しました。よろしくお願いたします。

# INFORMATION

## ポール・デルヴォー展

4月6日～5月26日

■学芸員による展示説明会

5月19日(日) 午後2時～

佐久市立近代美術館名品展

## きらめく日本画―大観・栖鳳から現代まで

6月8日～8月4日

■講演会 & ギャラリーツアー

6月30日(日) 午後2時～

並木功(佐久市立近代美術館館長)

■学芸員による展示説明会

6月16日(日)・7月21日(日)

いずれも午後2時～

## 《やさしいミュージアム講座受講生募集》

市民の方々に歴史や美術をより身近に感じていただけるよう、6月～10月までの毎月1度、全5回の連続講座を2講座開催いたします。

## ■仏教絵画に親しむ

6月～10月の毎月第2金曜日 10時30分～12時(全5回)

※ただし8月、10月は第1金曜日に変更

キーワードとなるテーマを毎回用意しながら、江戸時代に至るまでの仏教絵画の歴史をたどります。

鷹巣純(愛知教育大学教授)

定員50名 当館1階セミナールーム

■トリエンナーレが楽しくなる!

6月22日、8月24日、9月7日・28日、10月12日 14時～15時30分(全5回)

いずれも土曜日

8月から開催される「あいちトリエンナーレ2013」をより楽しめるように、勉強会を開催し、実際に会場で作品鑑賞もします。

講師:平川祐樹・志賀理江子(トリエンナーレ出品作家)、当館学芸員

定員30名 当館1階セミナールーム(8月はトリエンナーレ岡崎会場集合・見学)

《共通》 □参加費/無料(作品鑑賞のみ有料) □申込方法/往復ハガキに、希望講座名(ハガキ1枚につき1講座の申込)・郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記の上、5月15日(水)までに下記へお申し込みください。※各講座5回全て参加できる方のみご応募ください。※ハガキ1枚につき1人の申込に限りです。※応募多数の場合は抽選となります。□申込先/〒444-0002 岡崎市高隆寺町字峠1番地 岡崎中央総合公園内 岡崎市美術博物館「やさしいミュージアム講座」係

## 八重山の風土

年に一度ほど、沖繩に行く。特に石垣島を中心とした八重山諸島。この3月に訪れた際には新空港開港で、現代的な装いを少し残念にも思ったが、土産物屋を二巡したら、同一商品の価格がお店ごとバラバラで、公共性が高い場所にも拘わらず定価がないというゆるさ加減に勝手に安堵感を覚えた。もちろんこれを、本土の人間による「沖繩的なもの」への幻想だと非難されても否定しきれない。それでも沖繩、とりわけ八重山諸島には、揺るぎのない独自の価値観や生活観、時間感覚が確かにあると思う。

石垣島にある「アンパル陶房」は、宮良親子が営む陶磁器工房で、特に姉ゆうなさんの作品が好きで旅行の際には立ち寄る。沖繩に生息する鳥の姿を絵付けした器や動物の置物は、哀愁と共に凛とした孤独を感じさせ、小さく心を揺さぶられる。それは、次々に消費される本土では、作家たちが、作家として生き残る策を意識せざるを得ないのに対して、彼女が石垣島に根を張り、作家とだけでなく一人の人間として生き(父親が経営する宮良農園を手伝って、繁忙期には制作はストップするらしい)、そこに変わらないことへの決意や少しの諦めがあるからではないだろうか。と、これまた沖繩的なものへと思いを膨らませずにはいられないのであった。(千)

## おしゃべり、あれこれ。

### おひとりさま

今や世間に定着したと思われる「おひとりさま」ですが、みなさんは経験ありますか? そんな経験ないわ、という方も多いと思いますので、参考に私の経験を紹介します。

- ①外食・カフェ・ラーメン屋・ファーストフード店等は同士が多いので気軽に行けます。
  - ②映画館・どうせ周りは暗くなるので、他人は気になりません。
  - ③居酒屋・ゆつくりできまますが、メニューが数人で分けること前提の量なので、いろんな種類の料理を食べられないのが欠点です。
  - ④カラオケ・人前では歌いたくないけど、大声だしてスッキリしたいときに最適です。周りを気にせず好きなように歌えます。
  - ⑤旅・国内旅行しか経験がないですが、急な予定変更や行き当たりばつたりの旅を楽しめます。フリーきつぷの利用がおすすめです。
  - ⑥美術館・自分のペースでゆっくり作品が観られます。好きな作品をどれだけ鑑賞していいかが自由です。
- ここまでおひとりさまについて書きましたが、先日久しぶりに大学時代の友人と遊び、友達と過ごすのもやっぱり楽しいなと思いました。自宅と職場の往復になってしまいがちな日々ですが、オンオフをうまく切り替え、友人との時間も一人の時間も充実している、そんな毎日ならきつと楽しい。(酒)

編集後記 | 新しい年度が始まりました。大きな変化は、新しい学芸員が着任したことでしょうか。実に10年ぶりです。そして小さな変化は、学芸室の席替えをしたこと。見える景色が変わって新鮮です。このフレッシュな環境が、本年度の当館の活動に良い影響を及ぼしたと思います。(千葉)

表紙図版:ポール・デルヴォー 《夜明け》 1944年 個人蔵



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第56号 2013年4月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA